

鬼退治祈願の観音半身像（下槻瀬）

それは遠い昔、平安時代のこと。丹波の国の大江山に鬼がいたそう。鬼どもは村々を荒らし、都に出没しては女、子どもをさらっていった。帝は大変心を痛められ、源頼光に鬼退治を命じられた。

武勇で名高い源頼光は、四天王と呼ばれていた碓井貞光、卜部季武、渡辺綱、坂田金時に、豪勇で知られる藤原保昌も加え、総勢六人で鬼退治に向かった。

頼光一行は、途中所領の多田荘に立ち寄り、下槻瀬の蓮花寺に詣でた。そこで、彫りかけの木像が目に入った。高さは二尺半ばかり（約八〇センチメートル）、上半身だけで、両手を胸の前に合わせているように見える。目や口など顔はまだ彫られていない。この木像が気になった頼光が、住職にたずねたところ、

「観音菩薩の半身像を刻もうとしておりました。」

と、住職が答えました。そこで頼光は、

「妙に私に問いかけてくる。そうじゃ。この半身像にも鬼退治祈願をいたそう。」

と、貞光たちに言いました。

六人は、この半身像の前で祈願をして出発した。

一行はいくつかの峠を越え、大江山の麓にやってきた。

いよいよ鬼のいる山に入ってしまった。登っていくほどに山は険しく、谷は深くなってきた。行く手をさえぎるように雲行きが怪しくなり、ものすごい雨が降ってきた。たまたま、近くの洞穴に飛び込んだところ、そこには白髪の老人が座っている。すると、その老人が口を開いた。

「鬼退治に参られたのであろう。」

頼光は、何もかも知っているような老人のようすにただならぬものを感じ、たずねた。

「これは、よくおわかりでござるな。ならば、何かよい秘策はないものか？」

「では、教えて進ぜよう。鬼の大将は酒呑童子とい、いつも酒を食らっておる。さらに大力の持ち主じゃ。その上、疑い深い性格で、めったに人を寄せつけない。まずはこの大将に近づき、何を言われてもさからってはならぬ。安心したところで、この酒を飲ませるがよい。この酒は山桃から作ったものじゃ。鬼はこの酒を気に入る、きつと何杯も飲むだろう。その隙をみて、この眠り



薬を入れるのじゃ。」

頼光よりみつはいいことを教えてもらつたと喜び、山へ踏みこんでいった。やがて、都からさらわれてきた娘と出会い、娘の案内で、鬼の棲家すまかに着いた。

たちまち鬼の手下どもに囲まれてしまったが、道に迷つた修行中の野武士のぶしの一行だと言い張つた。すると鬼の頭かしらのところ連れて行かれた。

なるほど聞いたとおり、大きな体で恐ろしい顔をした、いかにも力のありそうな大鬼だった。

手下から話を聞いた頭は酒を飲みながら、

「道に迷つたというが、何か企たくらみがあるであろう。」

「いやいや。実は都に一度は行つてみたいと旅立つたが、途中で道を間違まちがえたようござる。」

「野武士が京へなあ。おもしろいことを言う。気に入つた。馳走ちそうを進すすめよう。酒を飲むがよい。」

鬼の頭は酔よいが回るにつれて、自慢話じまんを始めた。頼光が自慢話を聞きながら、山桃やまももの酒をさし出した。頼光は用心深い鬼の頭を安心させるために、まずは自分で飲んで見せた。酒に目がない頭は油断ゆだんして、山桃の酒を勧めすすめられるままに何杯も飲み続けた。そのうちひそかに入れた眠り薬が

効きいてきて、頭はぐっすり眠りこんだ。

さあ今だと、一行は刀を取り出し、一太刀ひとたち、二太刀と斬りつけ、とどめを刺さした。手下どもは頭がやられたと分かるや、ちりぢりに逃げ、姿を消していった。

頼光たちは閉じこめられていた女、子どもを救い出し、それぞれの家まで送り届けさせた。谷川で出会つた娘も無事に家に帰ることができた。

一行は、都へ帰る途中の三田の小野で雨に降られた。一軒の家で雨宿りあまやどをし、鬼退治の話かぶとを聞かせ、雨宿りの礼にと渡辺綱わたべのつなが兜かぶとを置いて行つた。

頼光は、洞穴どうくつで出会つた白髪の老人のことがずっと気になつていた。もしかすると、蓮花寺で祈願した観音半身像かんのんはんしんざうの化身けしんではなかつたのかと思おもい至いたり、再び蓮花寺に詣もつで、半身像に鬼退治ができたことを報告し、力を貸していただいたことにお礼を申し上げた。

今、その観音半身像は、蓮花寺の多宝塔たほうとうの中におられる。兜も、家宝として大事に伝えられているという話だ。